

総入れ歯てん末記

大分市 辻塚 雅行

どう詰め込んでも七人か八人が精一杯のスタンドバーで、大分市や湯布院町、宮崎の日南市などで開業している、若く颯爽とした歯科医師さん達と止まり木に並んだことがあった。六、七年前のことである。

飲兵衛の不思議なアンテナ装置が作動し、宮崎の日南市で桜齒科を開業されている河野先生と意気投合したのがこの時で、次回、来県の折は、早速二人で飲み歩き、我が家まで送ってもらうテイタラクとなった。

以後ずうーつと御好誼願っている。

六、七年前というと私は六十三、四の頃で、少々の衰退現象は否めなかったが、今日のように、意欲、気力の喪失、動悸、息切れ、目のかすみ等、重症とまではいかず、本人は若いつもりでまだまだ無理はきくつもりでいた。

それが老耄の域に踏み込んだ途端、老朽化は情け容赦なく高波のように押し寄せ、足腰などは五歳の幼児よりその動きは劣り、歯は痛みも痒みもなくポロポロ抜け、上顎0本、下顎六本のみ自歯が残存する無残な状態となった。老化は「自明の理」と認識してはいるものの、天を仰いで嘆きたくな

る。

若い頃、屋台で朝まで飲んで、店の片付けを手伝ってから出勤する日がたびたびあった。ある日、大蒜の醤油漬けかなにかが肴のとき、関連して臭い消しには歯を塩でみがくがいかとか、牛乳が効果があるとかの話になった。酔いどれどもは、己ほど天下の正論を述べる者はいないと絶対に思っているから、論議(?)は白熱した。

ひと癖もふた癖もある屋台の親爺さんが、どんぐり眼をひん剥いて、「俺はこの歳(六十代)になるまで、歯みがきなんぞしたことがない。なぜなら牛や馬、犬や猫はみがきやせんよ。それで虫歯、歯槽膿漏の奴がいるかえ。どうだ!」と薄汚い(?)それでも頑丈そうな前歯を「ニーツ」と見せて言った。

その説、誠にごもつとも、いたく感服つかまつたその日の論客連中のうち何人かは、爾後歯みがきを止めたはずだ。私もそんなひとりである。

まあ、歯に関する知識、常識がこの程度だから、口腔衛生など知るものかと、歯であれ、舌であれ、乱暴乱雑に扱ってきただ。その因果が、ポロポロ抜けの―落ち歯時雨―であるのは仕方あるまい。が、食べ物の粹(主として豆腐、梅干、大根おろし、酒…アル中初期症状となる…)、対話、特に電話応対には難儀することとなった。

配偶者やその他大勢は、歯医者さんのところへ、やれいけ、それいけと姦しい。明日行く、明後日は必ず参りますと一寸伸ばししているところに、タイミング良く宮崎から河野先生の登場となった。

河野先生曰く「自分と同門の歯科医師を紹介する。さらに自分も治療中に何回か関わるから安心なさい。」とのことだ。

こうなると親切は無にできないと決心がつき、「ノアデントルオフィス」の諫山先生に逢った。

ビジョンを語る口ぶりが新鮮で若々しく熱気がある。診療の流れの説明を聞いて、ますます気に入った。アル中と鬱状態だったので、何かこれで救われるのではないかと思った。唯、

「保険診療は行なっておりません」の一言が心痛となった。

保険がきいても、入れ歯は相当な金額が必要だと友人、知己が語っていたし、亡母がもらった記憶もある。歯の治療費はべらぼうに高価だというのが一般常識だから、「えいッ、儘よ」と腹を据え、費用の相談を持ちかけた。内心、「薄氷を踏むとはこれか」と思いながら…。

諫山先生は、私の下の息子より五歳若い。その人が、当方の貧困を見透かしたのか、実に配慮の行き届いた三案の治療計画と支払い計画を示してくれ、無理な点があれば相談しま

しようと言さしく言った。具体的なことは述べまい。訪れた人、ひとりひとりが心のこもった対応をしてもらえるはずだ。

平成十五年七月から治療開始となった。

建物が外観も室内もおよそ歯科医院らしくない。第一に看板がないから、淡い黄赤色の洋瓦の屋根、どこかメキシコかカナダ風の構造がクラブビュッテの様な趣がある。内部がまた良い。その日、その日の患者の治療時間帯が厳守されているので、歯科医院に付き物の子供の泣き声やその他の喧騒がなく、奥様兼アシスタントの院長夫人のいれてくれた緑茶などを啜つてひと憩いして、治療となる。流れる音楽がご夫婦の人柄そのもので、月に何度かの通院が数ヶ月、音痴の私が、それを楽しみに足を運んでいる。

先を急いで恐縮だが、治療の成果は抜群である。わたくし、上下総入れ歯にして月日が過ぎた。私の肉体部分と人工歯に血が通いはじめた。今もスルメをかじり、爪楊枝を使っている。

百聞は一見に如かずである。快適な空間で、よきパートナーである諫山先生から心地良い治療を受けた幸せを、意図せずだが駄文で綴ってみた。